

領域についてのフロストの考え

Frost's Idea of Zones

山 津 さゆり
Yamatsu, Sayuri

ABSTRACT

In this thesis, I will examine Frost's idea of zones by interpreting the four poems among his poems: "Into My Own," "The Middleness of the Road," "Beech," and "Pea Brush." Frost, who was apparently influenced by Milton, seems to have thought it very important to know that there are limitations to what human beings can do and that there are boundaries beyond which they must not go. He shows three ways of thinking about boundaries: thinking them clear, thinking them vague, and thinking that a thing, which seems useless in one zone, may be useful in another.

1.

Milton は、『楽園喪失』の第七巻において、天使ラファエルに次のように知識の制限について語らせている。

Knowledge is as food, and needs no less

Her temperance over appetite, to know

In measure what the mind may well contain,

Oppresses else with surfeit, and soon turns

Wisdom to folly, as nourishment to wind. (7. 126-30)⁽¹⁾

アダムとイブは、この制限の象徴である禁断の木の実を食べることによって侵してはならない領域を侵して墮落する。⁽²⁾ Milton は、人間には限界があること、侵

(1) Alastair Fowler, ed., *Milton: Paradise Lost* (London and New York: Longman, 1971) 364.

してはならない境界があることを強調している。Milton の影響を受けているとされる Frost は、ありふれた日常生活の場面や自然の情景を詩の題材にすることによって、境界についての Milton のこのような考え方をさらに発展させ、彼自身の見解を示しているように思われる。

Frost は、“There are Roughly Zones” という詩の中で、人間がいかに限度を知らない存在であるかを語り、領域というものを悟ることの重要性を説いている。

家の中にいる詩人は、家の外で零下の寒さと突風にさらされている桃の木のことを考え、次のように語る。

We think of the tree. If it never again has leaves,
We'll know, we say, that this was the night it died.
It is very far north, we admit, to have brought the peach.
What comes over a man, is it soul or mind——
That to no limits and bounds he can stay confined?
You would say his ambition was to extend the reach
Clear to the Arctic of every living kind.
Why is his nature forever so hard to teach
That though there is no fixed line between wrong and right,
There are roughly zones whose laws must be obeyed?
There is nothing much we can do for the tree tonight,
But we can't help feeling more than a little betrayed
That the northwest wind should rise to such a height
Just when the cold went down so many below.
The tree has no leaves and may never have them again.
We must wait till some months hence in the spring to know.

✓(2) 拙論「驚嘆の気持ちと知恵——『樂園喪失』試論——」（『藤井治彦先生退官記念論文集』，英宝社，2000 年）295-7.を参照されたい。

But if it is destined never again to grow,

It can blame this limitless trait in the hearts of men.⁽³⁾

詩人は、引用の三行目から十行目で、領域を無視して桃の木を本来育つ環境にない場所に持って来た人間の欲深さを指摘し、十二行目から十四行目では破壊的な自然の力を見くびる人間の傲慢さを指摘している。人間が自然の領域を侵したことによって、桃の木は枯れてしまうかもしれない。詩人は自責の念に駆られている。“What comes over a man, is it soul or mind—— / That to no limits and bounds he can stay confined?”（何が人を支配するのか、それは魂か知性か——/ 人はどんな制限にも境界にも限られないとは。）という二行から、人間は侵してはならない領域があることを知る必要があるにもかかわらずそれがなかなかできないことに対する、詩人の苛立ちと戒めの気持ちが現れているように思われる。

George F. Bagby は、この詩のもっとも重要な教えは “the value of refusing to learn the obvious natural lesson of caution” であるとし、さらに、“Why is his nature forever so hard to teach....” に関して、“Frost relishes the fact that man’s ‘nature,’ ..., is ‘forever so hard to teach’ about natural restrictions, because he is confident that ‘this limitless trait’ is no mere anarchic stubbornness; it is an assertion of life.” と解釈している。⁽⁴⁾ 人間の生き方は様々なものだから、このように限界をものとしめない人間の性質を賛美する考え方ももちろんあり得るであろうが、少なくともこの詩の “Why is his nature forever so hard to teach” という表現からは、限界を知らない人間に対する詩人の苛立ちを読み取るべきなのではないだろうか。“What comes over a man, ...?” に垣間見える詩人の苛立ちが、この表現において前面に押し出されているように思われる。

この小論においては、“Into My Own”, “The Middleness of the Road”, “Beech”,

(3) Edward Connery Lathem, ed., *The Poetry of Robert Frost* (London: Jonathan Cape, 1972) 305. Frost の詩の引用はすべてこの版に拠る。

(4) George F. Bagby, “The Promethean Frost,” *Robert Frost*, ed. Harold Bloom (Philadelphia: Chelsea House Publishers, 2003) 122.

“Pea Brush” の四篇を取り上げて、それらが領域について語っていることを考察してみたい。Frost はこれら四篇の詩を通して三通りの領域についての考え方を示していると考えることができる。最初の二篇の詩では明確な領域について語られており、三番目の詩では曖昧な領域について語られている。四番目の詩では、ある領域では役に立たないものが別の領域では役立つという状況について述べられている。以下の四章で、このような観点からそれぞれの詩を一つずつ詳解していきたい。

2.

“Into My Own” という詩では、Frost が独自の詩の世界を打ち出す決意を表明し、自分自身の詩の領域を定めているように思われる。この詩が彼の最初の詩集である *A Boy's Will* の巻頭の詩として収められていることも、それを裏付けるものとして、看過することはできないであろう。また Frost 自身この詩について、“The youth is persuaded that he will be rather more than less himself for having forsworn the world.”⁽⁵⁾ という解釈を付している。私は、この中の “rather more than less himself” と “having forsworn the world” に注目したい。前者は独自性を重視する姿勢を示しており、後者は世間の主流を否定する姿勢を示していると、私は思う。Frost は、世間の優勢なものに従うのではなく、独自の道を進む、すなわち独自の詩風を築くという彼の堅固な決意の表明をしていると考えることができよう。

Ian Hamilton は、Frost の独自の詩風について、次のように論じている。

His contact with the English scene at a time when the whole of traditional poetic practice was being called in question — principally by the Imagists but also, in their more cautious way, by the Georgian group which Frost was most involved with — this contact could only have encouraged and focused his ambition for a relaxed naturalness of delivery. What is crucial,

(5) Lathem, notes 529.

though, is that Frost took neither of the obvious or fashionable paths towards this naturalness — neither the path of free verse (for him, he once said, writing free verse would be like playing tennis with the net down) nor the other path of simply dropping in extra syllables here and there or removing them here and there, in order to oil the works of a basically mechanical traditionalism. The challenge he set himself was to risk admitting into a traditional framework what one might call the superfluities of talk — the hesitations, qualifications, repetitions, false starts, parentheses, and so on. His aim was to admit these whilst at the same time maintaining the regularized dignity of metrical speech.⁽⁶⁾

この指摘にあるように、Frost は自然な詩風を目指したが、その詩風を確立することは容易なことではなかった。彼は当時流行し始めた “free verse” の道を選ばなかった。“free verse” を書くことは、ネットなしでテニスをするようなものだとは彼は考えていた。文語体と口語体をうまく組み合わせることによって彼は独特な文体を生み出したと、私は考える。口語体と言うとわかりやすいと人は思うかもしれないが、Frost の場合、そのように安易なものではないということは、ここで付け加えておかねばならない。

“Into My Own” において、先に述べたように、彼はこのような独自の詩風を築く決意を示し、自分自身の詩の領域を定めようとしたように思われるのである。

この詩の一連目と四連目から、彼の堅固な決意を読み取ることができる。

One of my wishes is that those dark trees,
So old and firm they scarcely show the breeze,
Were not, as 'twere, the merest mask of gloom,
But stretched away unto the edge of doom.

(6) Ian Hamilton, introduction, *Robert Frost: Selected Poems* (Harmondsworth: Penguin Books, 1973) 15.

I should not be withheld but that some day
 Into their vastness I should steal away,
 Fearless of ever finding open land,
 Or highway where the slow wheel pours the sand.

I do not see why I should e'er turn back,
 Or those should not set forth upon my track
 To overtake me, who should miss me here
 And long to know if still I held them dear.

They would not find me changed from him they knew ——
 Only more sure of all I thought was true.

一連目の “dark trees”, “gloom”, “the edge of doom” という言葉や表現は、一見暗いイメージを与えるように思われる。「陰鬱な木立」が単に「陰気さ」を装っているにすぎないのではなく、「最後の審判の日」まで、つまり永遠に伸びると考えると、普通は暗い気持ちになるであろう。しかし、ここで重要なことは、批評家によって指摘されているように、この表現は、Shakespeare の “Sonnet 116” の “Love alters not with his brief hours and weeks, / But bears it out even to the edge of doom.” (ll.11-12) ⁽⁷⁾ の中にあるということである。この場合、愛が「最後の審判の日」まで続くというように、強い愛が語られているのである。このような文脈で用いられた表現をここで使っているということは、Frost には暗い気持ちはないということを示すものである。独自の詩風を確立するという Frost の前向きの強い決意を読み取ることができる。彼は徹底的に困難な状況に身を置こうとする、前向きな、むしろ明るいとも言える決意を示していると考え

(7) Darrel Abel, *It Sometimes Seems As If* (Xlibris Corporation, 2002) 52.

(8) John Kerrigan, ed., *William Shakespeare: The Sonnets and A Lover's Complaint* (Harmondsworth: Penguin Books, 1986) 134.

ることができる。他の者が取る道を選ばず独自の世界を確立することは難しく、陰鬱な気持ちに陥らせることもあるかもしれないが、詩人はそれに毅然として立ち向かおうとしているのである。

さらに四連目の二行では自分の信念が変わらないことが語られている。ここでもいかに詩人が堅固な決意をもって、独自の詩の世界の確立に臨んでいるかが示されているように思われる。そして Frost は、この二行において、文語体と口語体をうまく組み合わせることによって独特な文体を生み出すというその堅固な決意を早速実行に移している。

ほとんど文語体で書かれていると言ってもよいこの詩において、最後の二行は口語体で書かれているのである。文語体で書かれている中に際立って難解な箇所があるために、それとの対照で、最後の二行の口語体が肩透かしの印象を与えかねないほどである。特に、二連目の “I should not be withheld but that ...” (...ということがなければ私は引き止められないだろう) という言い回しは、文語体の最たるものと言ってもよく、しかも内容も非常に難解である。このような表現と比較すると、最後の二行は日常的な言葉や文体で書かれているということは一目瞭然で、格差を感じさせるかもしれない。しかしそれが Frost のねらいなのである。彼の二作目の詩集 *North of Boston* に収められている “The Wood-Pile” という詩は、逆に、ほとんど口語体で書かれているが、その中に効果的に複雑な表現や文語体が織り交ぜられている。その顕著な例として、“He was careful / To put a tree between us when he lighted, / And say no word to tell me who he was / Who was so foolish as to think what *he* thought.” における複雑な口語体と “One flight out sideways would have undeceived him.” における文語体を挙げることができる。

このように、Frost は一つの詩作品を通して、内容の点からだけでなく文体の点からも独自の詩風を築く決意を表明し、自分自身の詩の領域を明確に示している。Darrel Abel は “Into My Own” を “the proud world” からの決別の詩と捉えているが、Frost が自分自身の領域を定めているとしても、彼を取り巻く世

間から決別してそれとの交わりを完全に遮断するとは私は考えない。前述したように、Frost 自身の注釈にも “having forsworn the world” という言葉があり、世間との決別を連想させるが、必ずしもそのように理解する必要はないように思われる。むしろ、その言葉を、世間を拒絶するのではなく単に世間の主流を否定する姿勢を示すものと捉えたい。実際、この詩の二連目と三連目を読み解くと、世間からの決別という感覚とは程遠い印象を受ける。詩人は、一連目で語られている独自の詩の世界の確立という厳しい状況にいつかこっそり入っていくことになるのでなければ、引き止められることはないだろうと言っている。これは先に触れたように、非常に理解しにくい書き方をした箇所であるが、ここで詩人が言いたいことは、今はじっと構えていてもいずれは自分自身の世界に入っていくということであろう。だが詩人は、だからといって世間との交わりを絶つとは言っていない。それどころか、世間を象徴する “open land” や “highway where the slow wheel pours the sand” を見つけようとも恐れることはないと言っているように、世間から決別して隠遁生活に入るというわけではない。次の三連目においても、詩人は、彼を慕って後に従いたいと願う人々を排除するつもりはないと言っている。彼は、世間の人々とつきあいながらも自分自身の世界が揺らぐことはないという自信を示しているのである。

このように、Frost は “Into My Own” という詩において、独特な文体を用いることによって独自の詩風を確立する決意を示しながら既にそれを実践して見せ、自分自身の領域というものを明確に定めたと解釈することができる。

3.

次に考察する “The Middleness of the Road” という詩においても明確な領域について語られていると解釈することができるように思われる。ただこの詩においては、人間の定められた領域というものについて語られていると考えることができる。

The road at the top of the rise
Seems to come to an end
And take off into the skies.
So at the distant bend

It seems to go into a wood,
The place of standing still
As long the trees have stood.
But say what Fancy will,

The mineral drops that explode
To drive my ton of car
Are limited to the road.
They deal with near and far,

But have almost nothing to do
With the absolute flight and rest
The universal blue
And local green suggest.

この詩は、一種の風景描写から始まっている。坂道の頂上で道が終わり空に飛び立っているように見え、また遠くの道の曲がり目で道が森の中に入っていくように見える風景を描写している。道は空と森の中間に存在する。そしてここでは、道を人間の実生活の領域の象徴とみなすことができるように思われるのである。二連目の最後の行の“say what Fancy will”（どのように空想しよう）という表現は、普遍的な空や静止状態を表す森に対する人間の憧憬が暗示されるものの、続く三連目で、あくまでも地上に根ざした人間の現実の人生が非常に現実味を帯びた調子で象徴的に語られる。“The mineral drops that explode

/ To drive my ton of car” は、自動車のガソリンのことを意味しているのであるが、この描写は比喩にしても非常に現実的である。自動車が動く仕組みまでもが、簡潔にしかも明解な形で伝わってくるほどである。そして、この自動車を走らせるガソリンは道に限られていると語られているのであるが、ここから人間の実生活の領域が道によって象徴されているということを読み取ることができる。日々の生活に汗水を流す人間の領域は限られており、道の行程には “near” (近い) か “far” (遠い) かの違いがあるのみで、人間は実生活においては、もちろん鳥のように空を飛んで生活したり、森の木立のようにいつまでも静止したりしているわけにはいかないし、空想の世界に逃避することもできないのである。しかし、実生活はそうであるが、最後の四連目で人間の自由な空想の世界を締め出してはいないことに注目しておくことも必要である。Frost は、“The mineral drops” (ガソリンの雫) が “have almost nothing to do / With the absolute flight and rest” と語っており、ここで “almost” という言葉が使われていることを看過することはできない。ここに、詩人が人間の実生活の領域というものを明確に示しながらも人間の空想の世界がその領域に入る余地を残していることを読み取るべきであろう。

W. H. Auden は、Frost についてのエッセイの中で、次に挙げる George Peele の “Bathsabe’s Song” という詩と比較して、Frost のこの詩についての彼の考えを述べている。

Hot sun, cool fire, tempered with sweet air,
Black shade, fair nurse, shadow my white hair:
Shine, sun; burn, fire; breathe, air, and ease me;
Black shade, fair nurse, shroud me and please me:
Shadow, my sweet nurse, keep me from burning,
Make not my glad cause, cause for mourning,
Let not my beauty’s fire
Inflame unstaïd desire,

Nor pierce any bright eye
 That wandereth ⁽¹⁰⁾lightly.

Auden は, Peele のこの詩も Frost の詩も一人称で書かれているが性質が大変異なっていると指摘し、次のように述べている。

The first seems anonymous, hardly more than a grammatical form; one cannot imagine meeting Bathsheba at a dinner party. The second *I* names a historical individual in a specific situation — he is driving an automobile in a certain kind of landscape.⁽¹¹⁾

ここで “the first” は Peele の詩の一人称を指し, “the second *I*” は Frost の詩の一人称を指しているのであるが, Auden は, 前者の方には現実味が全くなく, 後者の方は現実在即しているということを指摘している。この指摘は正しいと私は思う。

“The Middleness of the Road” は, Frost 自身の他の詩, 同じ様に道を扱った “The Road Not Taken” を, 私に思い出させる。両者を比較しても, いかに前者が現実味のある詩であるかがわかる。後者の詩では, 道の描写が非常に詳細であるにもかかわらず現実味が乏しい。

... it was grassy and wanted wear;
 Though as for that, the passing there
 Had worn them really about the same,

And both that morning equally lay
 In leaves no step had trodden black.

ここでは人生の岐路に立った詩人が選んだ道について語られている。二つの道の微妙な違いについての詳細な描写は, 現実の道の描写というよりは, 人生における選択の難しさを表すための比喻であるという印象が強い。⁽¹²⁾これとは対照的

(10) W. H. Auden, *Selected Essays* (London: Faber and Faber, 1962) 146

(11) Auden 147

に, “The Middleness of the Road” の場合, 前述したように “The mineral drops that explode / To drive my ton of car / Are limited to the road.” という三行は非常に現実感が溢れている。道に関する詳しい描写はなく, “road” 一語で表されているに過ぎないが, “The mineral drops” という表現によって, 実際に自動車がガソリンを燃焼させ排気ガスを出しながら道を走る情景が目の前にありありと浮かんでくるのである。

4.

次に扱う “Beech” という詩は, 先に考察した, 明確な領域について語っていると思われる二篇の詩とは異なり, 曖昧な領域というものについて語っているように思われる。

Where my imaginary line
 Bends square in woods, an iron spine
 And pile of real rocks have been founded.
 And off this corner in the wild,
 Where these are driven in and piled,
 One tree, by being deeply wounded,
 Has been impressed as Witness Tree
 And made commit to memory
 My proof of being not unbounded.
 Thus truth's established and borne out,
 Though circumstanced with dark and doubt——
 Though by a world of doubt surrounded.

Frost はこの詩において, 自分がどんなに領域を定めても不安が残るということと語っていると解釈することができる。最後の二行を除くすべての行を使っ

✓ (12) 拙論「フロストの遊び心」(『経済理論』第320号, 和歌山大学経済学会, 2004年) 90-1.を参照されたい。

て、詩人は森の中に自分の領域をしっかりと明確に定めたことを、畳み掛けるように、自分に言い聞かせるように語っている。Frost は、自分の領域の “Witness Tree” (証の木) とするために、彼にしては珍しくわざわざ木に深い傷をつけることさえした。切って捨てられずに済んだ若い樺の木がりっぱに育ち、美しい飾りとして懸命に生きていることを賛美するという内容の、“A Young Birch” という優しい詩を書く詩人が、木に深い傷をつけてまで領域を定めたのである。彼は、自分が無限ではないことの証明を、“Witness Tree” に記憶させるために、敢えて木に深い刻みを入れた。

Andrew Lakritz は、“made commit to memory” に関して、“... made and commit are redundant.” と指摘しているが、⁽¹³⁾ここは、“made to commit to memory” と解釈するべきところであろう。実際、Frost は他の詩においてもこのような語法を用いている。“A Masque of Mercy” の “Don’t you be made feel small by all this posing.” (l.461) を挙げることができる。さらに “Five Nocturnes” の “II. Were I in Trouble” における “And I ... / Am touched by that unintimate light / And made feel less alone than I rightly should, ...” を挙げることができる。使役の “make” を受動態で使うときに、Frost は原形不定詞を使うこともあったようである。従ってここでは、“Witness Tree” は詩人によって傷をつけられ、彼の領域を「記憶させられた」と解釈することができるのである。

しかしながら、木に深い傷を刻み付けてまでして自分の領域を定めた詩人であったが、最後の二行で彼の確信が周りのものに対する不安や疑念の気持ちで揺さぶられていることが露呈するのである。木を深く傷つけるという行為も結局、不安や疑念を打ち払おうとする一種の焦燥感の現れと見ることもできよう。またこの不安や疑念は文体にも既に現れていたと見ることができる。この詩は “I” を主語とした能動態で書かれずに、受動態で書かれているということに注目

(13) Andrew Lakritz, “Frost in Transition,” *Roads Not Taken: Rereading Robert Frost*, ed. Earl J. Wilcox and Jonathan N. Barron (Columbia and London: University of Missouri Press, 2000) 209.

したい。詩の二行目から三行目に関しては、“I have founded an iron spine and pile of real rocks.”という書き方もできたかもしれない。また六行目から九行目に関しても、“By wounding one tree deeply, I have impressed it as Witness Tree and made it commit to memory my proof of being not unbounded.”という書き方もできたであろう。しかし、詩人は受動態によって表現したのである。ここから、詩人が自信たっぷりで領域を定めたのではなく、不安や疑念の気持ちによって揺らいでいることを垣間見ることができるように思われる。

このように、Frostは“Beech”という詩において、人間は自分の領域を定めるといっても常に自信满满であるわけではないということを語っていると言うことができるであろう。自分が定めた領域が完全に明確なものではなく、曖昧さが残る場合があるということを語っていると考えられる。

5.

最後に扱う“Pea Brush”という詩では、ある領域では役に立たないものが別の領域では役に立つ状況について語られていると解釈することができるように思われる。

I walked down alone Sunday after church
To the place where John has been cutting trees,
To see for myself about the birch
He said I could have to bush my peas.

The sun in the new-cut narrow gap
Was hot enough for the first of May,
And stifling hot with the odor of sap
From stumps still bleeding their life away.

The frogs that were peeping a thousand shrill

Wherever the ground was low and wet,
The minute they heard my step went still
To watch me and see what I came to get.

Birch boughs enough piled everywhere!——
All fresh and sound from the recent ax.
Time someone came with cart and pair
And got them off the wild flowers' backs.

They might be good for garden things
To curl a little finger round,
The same as you seize cat's-cradle strings,
And lift themselves up off the ground.

Small good to anything growing wild,
They were crooking many a trillium
That had budded before the boughs were piled
And since it was coming up had to come.

この詩の前半の三連では自然と人間の対立が語られているように思われるかもしれない。一連目は詩人が自然界に向かう目的が語られている。詩人は、自分が育てている豆の木の支えに使うために樺の木の枝をもらいに、友人がいつも木を切っている湿地へ向かうのである。ここで自然と人工の二つの領域が提示されている。二連目では“the new-cut narrow gap”という表現によって自然の中に刻み込まれた人工の領域が示されている。また、“stifling hot with the odor of sap / From stumps still bleeding their life away”という表現からは、自然と人間の対立の構造を読み取ることができる。人間によって切り倒された木の切り株から発せられ続ける命の叫びである樹液によって、太陽の自然な暑

さが息詰まるような暑さになってしまうというのである。切り倒された木の人間に対する憎しみが滲んでいるのを感じざるを得ない。三連目では明らかに自然と人間の対立が語られている。何匹もの蛙が、詩人の足音を聞きつけ鳴くのをやめて静まり返る。そして彼らは詩人をじっと見つめ、詩人が何を取りに来たのかを調べようとする。蛙が自分の領域を守ろうとして人間を警戒しているのは明らかである。

ところが詩人には蛙の警戒心は必要ではなかったようである。後半の三連では前半の三連で見られる自然と人間の対立の構造はない。詩人には自然を侵そうという気持ちは全くなく、自然を生かすために手を加えようとしているように思われる。むしろ自然と人間の効果的な共存の必要性が語られていると言うことができよう。

豆の木の支えに使うために木の枝を取りにやって来た詩人は、積み重ねられている樺の木の枝の下敷きになっている野生の花を思いやる。“Time someone came with cart and pair / And got them off the wild flowers’ backs.”（誰かが二頭立ての荷馬車でやって来て / 野生の花の背中からそれらの枝を取り除いてやるべき時であった。）という二行は、自然の恩恵を受けているものとして人間が自然に対してすべきことが語られている。特に「野生の花の背中」という表現には詩人の自然に対する思いやりの気持ちが凝縮されている。一方、今や野生の花にとって厄介者となっている樺の木の枝も、詩人のおかげで無駄にされることもなくなるのである。その枝は、詩人が庭で育てている豆の木の支えとして役に立つ存在となるのである。詩の最後の二連は非常に対照的な内容を語っている。樺の木の枝は、詩人の庭という人工の領域では役に立つかもしれないが、自然の領域では何物も成長を妨げることはできない生命力をもった野生の花の背を押し曲げるばかりで役に立たないということが、対照的に語られている。最後の一行で「芽をだしつつあるので上に出てこざるを得なかったのだ。」と詩人は言っている。これは非常に Frost らしい口語体の淡々とした表現であり、文体からも自然の飾り気のないもののもつ力強い生命力が伝わってく

る。詩人は、このような自然の生命力を妨げることがないように、少しでもその手助けをしようとしているのである。こうして彼は野生の花と樺の木の枝の両方を生かそうとしている。

このように“Pea Brush”という詩では、自然の領域では役に立たない樺の木の枝が人間の領域という別の領域では役に立つということを語っていると解釈できよう。

6.

本論では、ここで扱った四篇の詩を通して、Frost が領域についての自分の考えを三通り示していることを考察してきた。一つ目の考え方としては、領域には明確な領域があるということである。詩人自身の独自の詩風の確立という明確な領域であり、さらに人間全体の定められた領域という明確な領域である。二つ目の考え方としては、曖昧な領域があるということである。どんなに領域を定めても不安が残り自信满满ではいられない状況があると詩人は考えている。三つ目の考え方としては、ある領域では役に立たないものが別の領域では役に立つという状況があるということである。

最後に、Frost が、侵してはならない領域を侵した場合に呪いがかかるということについて語っている“A Brook in the City”という詩を紹介しておきたい。それは、ある町の人々が、自分の都合で小川を地下に閉じ込めたために仕事もできず眠ることもできなくなっているという詩である。詩人は、閉じ込められた小川で以前戯れ、その水の力、その勢いのことをよく知っていた者として、町の人々が小川を地下に閉じ込めたという、自然の領域を侵した行為に対して警鐘を鳴らしている。以下に挙げる詩の一部から、いかにその小川の水に恐るべき力があるか、そしてそれを封じ込めたために呪いがかったということがわかる。

Is water wood to serve a brook the same?

How else dispose of an immortal force

No longer needed? Staunch it at its source

With cinder loads dumped down? ...

... But I wonder

If from its being kept forever under,

The thoughts may not have risen that so keep

This new-built city from both work and sleep.

引用の一行目に、「水は同様に小川に役立つ木であるか。」とあるが、これは、「木が道から簡単に取り除くことができるように、水も小川から簡単に取り除くことができるだろうか。」ということを意味しているのである。この一見簡単そうで理解しにくい一行から、何物も断ち切ることのできない小川の水の “an immortal force”（不滅の力）を感じとることができる。このような力を持つ小川が何の罪もないのに地下に閉じ込められたのである。そして最後の三行で語られているように、新しく造られた町の人々は、永久に地下に閉じ込められた小川によって呪いをかけられたがごとく、仕事もできず眠ることもできないようにする思いに苛まれているのである。詩人は、侵されてはならなかった自然の鬱積した恐るべき力の爆発を我々に予感させている。語り口が淡々としているだけに、ますますその不気味さが増すように思われる。Frost は、この詩を通して、自然の領域には人間が決して手を加えてはいけない領域もあるということを警告しているのではないだろうか。